

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

時をこえて　　未来へ

宮城県 宮城県仙台二華中学校 三年 井崎 英里

雪どけを迎えた春、私は「ダムより高い鯉のぼり」の記事を新聞で見つけ、釜房ダムを訪ねました。目の前に広がる森と湖。優雅に泳ぐ鯉のぼり。そんな美しい春の景色を、一枚の風景画として残したいと思っただけです。

釜房ダムとは、私の住む仙台市より西の、宮城県のほぼ中央を流れる名取川の支川、碁石川上流の川崎町という小さな町に作られた特定多目的ダムです。上流の太郎川、北川、前川より集められた水は、ダムによる釜房湖となり、私が訪ねた日も、湖いっぱい満たされた水一面が、遙か遠くは瑠璃色に、時々太陽の光を浴びて金色に輝いて見えました。ダムを囲むように連なる山々の緑、春を知らせる満開の桜の淡い紅色、ダムのゲートから流れ出るしろかね色の水、そんな風景画のような世界の大空を、大きな鯉のぼりがのびのびと泳いでいました。これが私の国、日本の水の源であり、この地球が「水の惑星」と呼ばれる由縁なのでしょう。

世界には、水資源に恵まれていない国が数多くあると聞いています。水の惑星と呼ばれる地球であっても、利用可能な淡水の割合は極わずかで、ほとんどが海水、私たち人間をはじめ、あらゆる生物が生きるために使える水ではないのです。

この三月に訪ねたシンガポールもまた、水問題を抱えた国の一つでした。赤道直下に位置し、年中気温と湿度が高く、降水量も多い国であるのに、狭い国土には大きな河川も雨水を貯める土地もありません。さらには国土自体の保水力も乏しいことから、飲み水のほとんどを隣国からの輸入に頼っていると聞きました。飲み水が手に入らないわけではないのですが、滞在初日に、蜜柑色をした三〇ミリリットルのボトルを渡され、滞在期間中は、毎朝このボトルに水を入れて持たされることとなりました。水を贅沢に使う観光が有名な都市の、現実の水問題に私は

強い衝撃を受け、いつも以上に水を大切にいただくように心がけました。シンガポールの水事情を思い出しながら、私は自分の国である日本のことを考えました。日本には四季があり、梅雨や秋雨の影響で、一年の降水量に大きな変化はあるものの、世界的に見れば、恵まれた水環境のはずです。自宅にも学校にも、街のいたる所に水道が引かれ、その蛇口をひねれば、水やお湯がすぐに流れ出ます。そのため、私たち日本人は、いくらでもあるものたとえに「湯水の如く」と使うのです。果たして水は、本当にいくらでもあるものなのでしょうか。

私の忘れかけていた記憶、忘れようとしている記憶「東日本大震災」。小学校一年生も終わろうとしている春のあの日まで私は、水のない生活をしたことも、考えたこともありませんでした。蛇口から水の出ない日々、やっと水を手にできた時の喜びを、私は忘れられません。空から容赦なく降る雪も、沿岸の町を襲った津波もまた、水の別な姿であることが恨めしく、未来の見えない不安に誰もが涙を流した日々。時間という魔法が、少しずつ人々の心を癒やしてくれてはいるものの、何かを皮切りとし、水の隠された本性、恐ろしい姿を度々思い出すのです。

あの日から、水に対する私たちの見解は確実に変わりました。水を大切にすると同時に、いつの日か再び変貌する水の姿に警戒し、備えるための訓練が続いています。

釜房湖の美しい水を眺めながら、ふと、かつてのこの湖の下に存在した豊かな耕地の広がる小さな町のことを考えました。そこに暮らしていた人々の思いと、今、目の前に広がる美しい湖とダムが、現在の私たちに不自由なく水を提供しているという現実をです。

残すべき水の歴史は、震災だけではありませんでした。今日見たこの美しい風景を、私は過去と共に未来へ描き残したいと思います。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

水道水が手元に届くまで

僕は、水が大好きです。喉がかわいた時は、さっとコップを手にとり、水道水を口にします。蛇口をひねれば水が出る。そんな当たり前に思える生活を送っていました。

ある日、その水について疑問がうかびました。「この水、どこからどうやってきているのだろうか？」

と思った僕は、自分の地域に水が届くまでを調べ、施設の見学をしに岐阜県八百津町の丸山ダムと愛知県犬山浄水場を訪れました。

丸山ダムは、直接愛知用水とは関わりを持ちませんが、木曽川の下流域を守る大事な役割を担っています。まず僕は、管理所の方に連れられ、慰霊碑を訪れました。百メートル級であるダム建設に、犠牲者が出ていたようです。安心して人々が生活できる様に、安心して僕達の手元に水が届く様にするために、大切な命を落としている人がいることを知り、胸が痛くなりました。僕は、慰霊碑に手を合わせました。

又、丸山ダムや下流域に建築が計画されている新丸山ダムの建築により、やむを得ず、立ち退きをしなければいけない人達がいることも知りました。多くの人々の生活のために、故郷を離れた人達の思いを考えると、複雑な胸中でした。僕のおじいちゃんも、八百津の山を、ダム建築のために売っていました。

「山を売ってしまったのはもったいなかったな」と話していました。

そんな人達の思いを一切無駄にはせず、日々ダムは、多くの人々のためにフル稼働しています。見学時も、ゲートが一門放流され、管理所では様々な機械で、様々な事を加味しながら、操作が行われていました。

そして、たくさんの方の思いが詰まった水は、木曽川を下り、同町の兼山取水口により愛知用水へと入ってきます。水道水として生まれ変わるため、浄水場できれいな水にします。今回は、犬山浄水場を見学させ

愛知県 扶桑町立扶桑中学校 一年 真野 聡真

ていただきました。場内には、巨大な沈でん池やろ過池、浄水池などとにかくでっかい設備がたくさんあります。それもそのはず、一日で約三十四万四千三百立方メートルの水を給水できるのです。管理所では、場内の様子を一目で見ることができるようです。無数の機械であらゆる設備を操っています。

そんな浄水場では水質管理を欠かしていません。設備ごとに細かくチェックをしています。検査員の方々が、美味しく安全な水を届けるべく、日々たくさんの方々のために丁寧に管理をしています。しっかりと薬品で消毒をした水は、市町の配水池へと送られ、そこから各家庭へ供給されます。

日本の様に水道水を安心して飲める国は世界でもごくわずかです。実際に海外に行くと、飲食店に入っても、水が出てくるなんてまずありません。日本では当たり前でも、他の国にとってはもったいの話です。時々、水道水を飲むことに抵抗を覚える人を目にします。日本の水道水は世界一美味しい水道水と言っても、決して過言ではありません。ですが、その水が蛇口をひねって出てくるには、たくさんの方々の努力があったり、人生を変えた人もいるということを、決して忘れてはいけません。上流から下流。浄水場から手元へ届くまで、両手両足の指があっても足りない位の方々の思いが乗せられています。水道水が美味しい秘密は、これなのではないかと僕は思います。又、日常生活でもこれを心の片隅に残しておくだけで、水への印象が変わり、節水などへ繋がるのではないのでしょうか。水も限りある資源です。一人一人が水に対する意識を変え、誰もが暮らしやすい社会を作っていききたいと思いました。

農林水産大臣賞（優秀賞）

水の恩恵

鹿児島県

学校法人津曲学園鹿児島修学館中学校

二年

松久保

幸来

梅干し、明太子、納豆、キムチ、アツアツのおみそ汁・・・どれも炊きたての白いご飯にピッタリだ。

私は白いご飯が大好きだ。夏が終わり、新米の出回る季節になると、私のテンションは一気に上がる。炊飯器をパカッと開けた瞬間に香る新米の香り。湯気の向こうに見える一粒一粒のお米がツヤツヤと光り輝く。こうして新米の炊き上がった様子を思い浮かべるだけでもヨダレが出そうになる。

そんな白米好きの私にとって、五月二日の伊佐市、湧水町の「川内川から取水する水田六百二十ヘクタールの水稲栽培を中止する」という決定はショックだった。

今年の秋には伊佐の新米の収穫量が減り、なかなか口にするのができなくなるかもしれないのだ。

湧水町や伊佐市の川内川では、霧島連山えびの高原・硫黄山の噴火以降、魚の死がい的大量に見つかっているという。えびの市の長江川では、同じく噴火以降、環境基準をこえるヒ素などが検出されている。その影響を受けて、今回の水稲栽培の中止は決まった。

私の知っている川内川は、さつま町宮之城を流れる、祖父が小さい頃（約七十年前）に夏の間毎日水遊びをしていたという川だ。

宮崎県の硫黄山の噴火が、鹿児島県の川内川に影響を及ぼすなんて、とても不思議に思い、地図を使って川内川を上流に向かってたどってみた。すると、川内川は宮之城よりも北にある鶴田ダム、曾木の滝、伊佐市を通って湧水町、宮崎県のえびの市、そして熊本県の球磨郡あさぎり町の白髪岳が始まりであるということが分かった。さらに詳しく調べてみると、川内川は、流路延長約百三十七キロメートル、流域面積は約千六百平方キロメートルもあるとのこと。

百三十七キロメートル。なんて長い距離を水は旅をしているのだろう。

百三十七キロメートルの間に、川の流域に暮らす人々の飲料水などの生活用水、稲作などのための農業用水、製紙業などに使われる工業用水、その他水力発電などに使われ、たくさん恵みを私たちにもたらしてくれている。

蛇口をひねれば水が出てくるのは当たり前。朝起きて水で顔を洗い、水を使って作られた食事を食べ、汗をかいたらシャワーを浴び、のどが渴いたら水を飲む。普段から私の生活の中で水は生きるために欠かせない大事なものはあるが、水が生活の中に存在することが当然のことになりすぎて、水の役目について改めて考える機会はなかった。しかし、思った以上に水は私の生活に密着しているようだ。私の大好きな白米のためには、農業用水として美しく、きれいな水がなければならぬ。この作文用紙を作るときにも、製紙工場でたくさん水を使っているのだ、ということに改めて気付かされた。私が直接手を触れたり、目にすることがない色々な場所で、水は大活躍している。

今回の川内川水系の白濁が、少しでも早く元の状態に戻り、安心して農業用水として使える日が来ることを願うと同時に、水が私達の暮らすこの地球上に存在し、私達の生命を支えてくれていることに心から「ありがとうございます。」と感謝の気持ちを伝えたい。そして、このきれいな水がいつまでも地球上の全ての生き物にうるおいを与え続けていけるように、水をきれいに使える人間でありたいと、私は強く思っている。

経済産業大臣賞（優秀賞）

めぐる一筋の水

一筋の水にどんな道のりがあったのか、僕らは知らない。「タオルづくり」と聞いて頭に思い浮かぶのは、大きな織機、鳴り響く音。僕もそうだった。今までは。

染色工場のオープンファクトリー。目の前の光景に、僕は興奮した。固く巻かれた糸を柔らかく巻き直す。植物である綿糸についた天然油分を洗い落とす。これらの下準備がなされて初めて、糸は染料を吸い、色を変える。

染色では、水が大きな鍵を握る。今治平野を流れる高縄山系の良質な軟水。石鎚山からの地下水。今治のタオルづくりを支えているのは、美しく豊富な水資源に他ならない。

見学させていただいた工場では、一日に四、五トンのタオルを染める。そのためにその十倍の水を使う。使用後は環境に影響を及ぼすことがないように十分な処理を行い、瀬戸内海に返す。水なしでは成立しない産業だ。

かつて、この町を流れる川は「七色の川」と呼ばれていたそうだ。「川の水が、ピンクや黄色だったんだよ。」

母は、幼い頃に見た近所の川の様子を話してくれた。高度経済成長期におけるタオル生産量の急増。それに伴い、川沿いには染色工場が立ち並び、大量の染色排水が直接川へ放流された。結果として、小魚やエビは姿を消し、住民の安全な暮らしさえ脅かされていた。そこで、今治市では、河川事業と下水道事業が一体となり清流復元に向けた取り組みが進められた。現在では、川は本来の水の色を取り戻し、「七色の川」の面影はない。魚や亀が自由に泳ぎ野鳥が羽を休めている。「水に使わせてもらっとるんよ。水は、糸や生地の色や発色、やわらかさと大きく関係する。だから、一滴の染料も、一滴の水も、私らは無駄にしないよ。」

かみしめるようにそう話してくださいました職人さんの言葉が胸に響く。今まで僕は、一度でもこんな風に考えたことがあっただろうか。

愛媛県 今治市立近見中学校 二年 森 温大

水は、町を、暮らしを、循環する。血液が体中に行き渡るように。物言わず、等しく。

だが、穏やかに流れる川面のそばで、僕らはそれを当たり前と思っていないだろうか。「絶えることのない清らかな水」。その水は、本当に絶えることはないのだろうか。

昨年開催されたえひめ国体。ボート競技会場となった玉川ダムは、洪水による被害を軽減するとともに、農業用水や生活用水、さらにタオルづくりをはじめとする工業用水を確保するために築造されたものだ。玉川ダムの完成後、洪水や水不足に悩まされることはほとんどなくなった。しかし、昨年は、競技開催が危ぶまれるほどの渇水。一転して、台風による集中豪雨。ダム下流には氾濫危険水位まで土色の濁流が押し寄せてくるなど、水の怖さとダムのありがたさを改めて思い知らされる年となった。たった一つのほころびから、水はいとも簡単にこぼれ落ちていく。

染色工場にあるボイラー用や洗浄用以外にも、近年ではIC産業や医薬品産業で新たな水需要が台頭してきている。と同時に、昭和四十年代には平均三六パーセントほどだった工業用水の回収率が、現在では約七九パーセントにまで上昇しているという記録を見つけた。まさに「一滴の水も無駄にしない」あの想いの賜物だろう。農業用水、生活用水、工業用水。めぐるのは同じ一筋の水なのだ。

僕は、この町が大好きだ。この町の産業が大好きだ。十年後、僕らが未来を拓く。限りある自然の恵み。その水を大切に「使わせてもらって」子や孫にバトンを渡そう。何度も何度も、水と人との関係を見つめ直そう。今よりもっとうまく共生できるように。まっさらな気持ちで、背筋を伸ばし、新しい知識や経験を吸い込もう。蛇口を閉める手に力を込める。この町の一員である誇りを持って。

一筋の水にどんな道のりがあったのか、僕は知っている。

国土交通大臣賞（優秀賞）

源流の里から未来をつくる

豊かな森につつまれている小菅村。七三〇人と人口は少ないが、村の人たちは皆家族のように過ごしている。ガラスのようにすきとおっている多摩川の源流、小菅川が村の自慢だ。そんな美しい小菅川で育てられたのは、緑があざやかで新鮮なワサビ、そして活きのいいヤマメ。小菅村では、自然そのものを生かした特産物が生産されている。

五年生の時、初めてお刺身を口にしたのはヤマメだった。歯ざわりがよく、かみしめるたびにヤマメのおいしさが口に広がった。ヤマメのとなりにあったのは、みずみずしいワサビ。ヤマメといっしょに口の中に入るとワサビのピリツとした辛さに目を見開くほど驚いた。このヤマメのコリコリとした食感とワサビのピリツとした辛さには、どんな秘密が隠されているのか気になった。村の大人にどうして小菅村の特産物が新鮮なのか質問してみると、「小菅の水がきれいだから、おいしいから新鮮なものが食べられるんだよ。」と答えてくれた。その時、私は確かワサビは水のきれいな所で作らないと元気に育たないということを出した。小菅村のきれいな水があるからこそ、おいしくて新鮮な特産物が食べられるのだ。

小菅村は、下水道処理人口普及率が百パーセントを達成している。平成二十七年末の国内の下水道処理人口普及率は七七・八パーセントであり、地方ではまだ下水道が整備されていないところもある。人口七三〇人の村で百パーセントというのは驚異的な数字といえる。これは村の人々の「小菅の川をよごしたくない」、「このきれいな小菅川を維持していきたい」という思いがあるからこそだ。また、村にはこんな言葉がある。「シモノシには迷惑をかけられない。」この言葉は、「下流の人には迷惑をかけられない」という意味であり、村の人たちの志でもある。下流の人のことを考えて自然を守ることは、村の住人にとってあたり前のことなのだ。私も小さい頃から村の大人と一緒に、川の清掃活動に参加し、

山梨県 小菅村立小菅中学校 一年 古谷 梨那

「ここは東京都の大切な水がめだ」と教えられてきた。私の母は東京の出身であり、まさに「シモノシ」だ。このつながりに気が付いたとき、村の人たちへの感謝が自然と湧いてきた。

小さな村でも、一人一人の気持ちがあわされば、きつといい環境をつくっていく。村の環境や特産物を守ることは、村の生活を守ることだけではなく下流の人たちの生活も守っている。私も自分のことだけではなく、もっと広い視野でものごとを考えたい。将来、自分に子どもができたとき、お風呂や水道の水が汚れていたなら生活していく上で望ましい環境とは言えない。水は人の生活を守ることだけではなく、命をつないでいるということを忘れずにいることが大切ではないだろうか。「下流の人」だけではなく、下の世代にも迷惑はかけられない。

環境大臣賞（優秀賞）

室根の里から海をおもう 岩手県 岩手県立一関第一高等学校附属中学校 三年 菅原 菜央

ある雨の日。

灰色の空気に沈んだ室根の山に、無数の雨粒たちが降り注いでいます。その中の一滴が、こうつぶやきました。

「もうすぐ僕らは地面に落ちて弾けてしまう。なんてはかない運命なんだろう。」

「いやや雨くん、そんなことはないよ！」

答えたのは、大きな葉っぱを揺らす、まだ若い木でした。

「なぜ？じゃあ僕たちは、どうなるの？」

小さな雨粒は、若い木の葉っぱの上にとびん、と着地すると木に尋ねました。

「降った雨粒が室根山の森の土に浸みると、雨水に土の栄養分が溶け出すんだ。その水が、大川の流れに乗って、気仙沼の街を走り、やがて気仙沼にたどり着く。森の力が海を豊かにするんだよ。そう、雨くんたちが森と海をつないでいるのさ！」

そんな自然の音が聞こえてくるような美しい町、室根町。私が住むこの町では、毎年夏に「森は海の恋人」植樹祭を行っています。この植樹祭の始まりは、宮城県気仙沼市の養殖力キ漁師さんたちによるものでした。森と海には、どのようなつながりがあるのでしょうか。

今から三十五年ほど前、気仙沼湾では、ある深刻な問題が発生していました。養殖のカキがすべて毒々しい赤色に染まってしまったのです。原因は、プランクトンの異常発生による赤潮。カキは生きるために大量の海水を吸うため、赤潮の影響を直に被りました。血ガキと呼ばれた真紅のカキは、廃棄処分するほかなかったのです。

その当時、気仙沼湾に注ぐ大川沿いでは、工場の排水により、水質があまり良いものではありませんでした。また、降雨のたびに山の土が川

に流入したことも影響しました。川の源流である室根山の森林は、長く人の手が入らず荒れていたためです。

このような森の異変が、海の異変をも招いていたことに気づいたカキ漁師たちは、大川中流域の住民と力を合わせ、森への植樹を始めました。植えるのは、主に秋に葉を落とし、良質な腐葉土をつくる広葉樹です。しかし、真つすぎな針葉樹と違い、曲がった部分の多い広葉樹は材木としては使えません。植樹の話が持ち上がったころは、住民の反対の声も大きかったようです。しかし、漁師たちが海と森との密接な関係を丁寧に説き、植樹への協力を感謝することを忘れずに根気よく活動を続けた結果、年々事業を拡大し現在のような植樹祭になったのだそうです。

私たちが植えた木々の向こうに、清らかな海があり、その海の命は私たちの生活に密接に結びついています。そのことを心にとめて行動することが大切だと私は思っています。だから、私は日常の中で、例えば次のようなことを心がけています。食事は食べきれぬ分だけ自分でよそい、食べ終わったら汁や油分を要らない紙で拭いてから洗います。学校で美術のパレットを洗う時も同様で、この時使うのは筆洗に残った水です。書道教室でも書き損じた紙で硯や筆を拭いてから洗っています。こうすれば、拭いた分だけ汚れを川に流さずに済むからです。

森の命は、海の命とつながっています。そして、海の命は私たちに恵みをもたらしてくれます。森と海を守るために、私たちができること。それは、まずは知ることです。命のつながりを、私たちに与えられている恩恵を知り、自然を守るために行動を起こしていくことが大事なのではないでしょうか。

食卓の向こうにある海を、絵筆の向こうにある海を、そして、森の向こうにある海を、忘れてはいけません。私たちは自然に生かされているのだから。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

豊川の清掃活動から水について考える

「水は生物にとって一番大切な物なんだよ」この言葉は私の母方の祖母の口癖です。だから母の実家に行った時、この言葉を祖母から聞かない日はありません。

今年の正月、家族で母の実家を訪ねた時、祖母と久しぶりにお風呂に入り、口癖の理由を聞いてみました。すると祖母は私が知らなかった昔の事をいろいろ話してくれました。

母が小学校にあがった頃、以前より太ったことを気にした祖母は、ダイエットをしようとして水分をなるべく摂らないように心がけたそうです。すると一週間経ったある朝、急に意識を失い病院に搬送されました。病名は脳梗塞でした。病院での対処が迅速・適切であったため後遺症も無く九死に一生を得た祖母は早く退院できたそうです。それ以来祖母は懲りて水分をこまめに摂るようになったそうです。だから私たちにも「水をこまめにとるようにしなさい」とよく言います。祖母はそんな命に関わる体験があったからこそ五体満足で生かされたことに感謝して、水がいかに生物にとって重要であるかを痛感し、水に感謝することを何かしようと考えました。

豊橋市の中心には豊川という一級河川が流れていて、その支流の清掃活動が定期的にボランティアによってなされていますが、祖母は元気を取り戻して以来その活動に必ず参加しています。私も物心が付いた頃より祖母に連れられて参加し十年程になります。清掃活動に参加してゴミを集めていて次第にわかってきたことがあります。ゴミは回収してもその量は一向に減ることなく、逆に毎年増える傾向にあります。ゴミを出すのは人間です。人間一人一人の意識を徹底的に改革しなくてはいくら清掃活動しても意味の無い事だと思ふ様になってきました。それにはどうしたらいいのでしょうか？私は悩みぬいた末ある考えにたどり着いたのです。

今や街のあちらこちらで公共施設や事物に名前がついているように橋

愛知県 豊橋市立章南中学校 三年 渡辺 風花

や堤防に命名権、宣伝広告を応募して、それで集まったお金で川の環境を守ってゆく費用を算出してみようでしょうか？橋や堤防に宣伝広告を載せれば、そこを通りかけた運転手の目に留まり興味をひくものです。興味をひくということは川や水に対して無関心な人たちの意識改革に繋がってゆくのではないのでしょうか。

それともう一つ、川の環境を保つには支流・下流の清掃活動に限らず上流からきれいにしなければならぬと思います。なぜなら川は上流から下流に繋がっているからです。だから上流の森林保全も大切だと思うのです。

今年私は家族で豊川の源流である新城の山奥を訪れ、川の始まりを観察しておこうと思いました。そこでは昨年の長雨で一部の森林が崩れ山肌が露わになっている箇所がありました。それを見て「森林が破壊されれば、それ以下の水も汚すことになる」と思いました。

二千二十四年から新たに森林環境税が導入され、毎年一人千円を支払うことになりました。私も森林保護に繋がるこの税の導入には反対はしません、その使い道として拡大解釈せず、ストレートに森林保護の目的に使用してもらうことを期待しています。

今や日本のきれいで豊かな水は世界から注目されていて、外国の資本が金に任せて水源を持つ森林を買いあさっています。このままでは日本の飲み水がピンチです。

三月ブラジリアで第八回世界水フォーラムが開催され、約百七十か国三万五千人が参加し、世界中の人たちが飲料水や水の衛生について大きな関心を持っています。日本も、もつと水に対して危機感を持つて接しなければ、いずれ安全できれいな水を手に入れられなくなるのではないのでしょうか。

一人一人の意識改革は小さなことから始まりますが、いずれ大河となり実を結ぶことを信じて清掃活動を続けていきたいと思ひます。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

今も昔も

群馬県 群馬大学教育学部附属中学校 三年 和田 菜花

私の部屋の窓からは浄水場が一望できる。そこにある大きなプールのような三つのろ過池は、空に浮かぶ雲を鏡のように水面に映し出している。傍には、緑青が吹いて歴史を感じさせる給水タンクが天高くそびえ立つ。春にはツツジ、秋には紅葉など、四季折々の自然と調和しており、その美しさは筆舌に尽くしがたい。この敷島浄水場は私にとって、とても身近な存在なのだ。

しかし見えているのはほんの一部分で、ほとんどの設備は地下や屋内にある。ここでは主に四つの工程で浄化処理を行っている。第一に、豊富な地下水をくみ上げる。近くを流れる利根川の水ではなく、地下水を水源とするのには理由がある。長い年月をかけて水が染み込む時、土壌がフィルターのように不純物を取り除いてくれる。川の水よりも良質なので、浄化処理が簡素化され、より美味しい水になるというわけだ。大きなろ過池の底には、砂が敷き詰められており、その間を通り抜ける際にさらに不純物を取り除かれる。第二には、塩素を用いて、主に大腸菌などの人に有害な菌を消毒する。その後、人間の健康に関する三十一項目、水道水としての必須条件二十項目の、全五十一項目もの厳しい水質検査をする。これに合格した安全な水が私達の家へ届けられる。この水は、高度な技術とそれを担う人々の努力の賜物なのだ。

しかし世界では現在、日本では考えられないような水に関する問題が起きている。

アジア諸国では水道からきれいな水が出ないところも多い。そこで井戸水を使うのだが、地下の有害な物質を含んでいることも多々ある。身体に悪いと知りながらも、生きるためにその水を飲まざるを得ない人々がいる。

また、子供や女性が水くみに時間を奪われて、学校に通うことができない現状がある。なんと「水」は教育問題にも影響していたのだ。また、

ある地域には学校に女子トイレがないために、女子が学校に行けないという現状もある。トイレがないことが女性の自由の足かせになっていることに驚いた。これらは私の予想をはるかに超えていた。

フィリピンでは水の価格の問題がある。それは、都市部に住む富裕層が水道水を安価で使用できる一方、それ以外の地域には水道が無いので、その約十倍のお金を払って水を買っているというものだ。金持ちの方が安く水を使い、貧困にあえぐ人々の方が高い水を買わなければならないなんて、本当に変な話である。世界の現状を見ると、水と人間の生活はどこであつても密接に関わり合っているのだ。早急に解決すべきであると思つた。

もし安全な水が簡単に手に入るようになれば、人々の命が救われるだけでなく、子供が教育を受けることが出来たり、女性も社会にどんどん進出していけるようになる。つまり経済発展にも繋がるのだ。誰もが安価に安全な水を得られれば、暮らしやすい世界になると思う。水は、私達に幸せをもたらす一方、生きていくのに不可欠であるが故に問題の種類にもなる。私がこうして幸せな毎日を過ごすことが出来ているのは、「水」に守られているからなのだ。痛感した。水道から出る水は、ただの水ではなく実は尊いものだったのだ。

「この給水タンクは私と同じくらいの歳なのよ。」

お向かいのおばさんが言っていたのを思い出す。昭和四年から今もなお休むことなく水を送り続けたそのタンクの姿は、上州のかかあ天下の芯の強さと優しさを持った彼女の姿と私の中で重なり合った。今も昔も、みんなの笑顔の源となる「水」を守り続けている敷島浄水場を、改めて誇りに思つた。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「ありふれた水に思うー二つの感謝」 福岡県 福岡教育大学附属福岡中学校 二年 宇野 由里子

「走らずに前に詰めて！」

指導員の先輩方の大きな声。黙々と歩く集団。鍛錬遠足練習の日、晴天に恵まれ、ワクワクしすぎて水筒を忘れてしまった私。日頃は美しい河畔の散歩道が自慢の室見川。鍛錬遠足だけあって、先生・先輩方の雰囲気も厳しい。シジミとりや潮干狩りに来る見慣れた風景も、今日はギラギラと照り返しうらめしい。

折り返し地点でのお昼の時間。公園によくある飲み水用の蛇口を見つけ、弁当よりも何よりも先に思いつき水を飲んだ。のどの渇きが癒されるなどという表現では足りない。体中の隅々まで潤いが染み渡るようだ。一度飲み終わって、いや、またもう一度。

「はあー、ホツとしたあー。」

本当にその水道水はおいしかった。心から、有り難いと実感した。

後日、悠々と流れていたあの室見川と水道水の関係に興味がわき、調べてみた。室見川の水は福岡県糸島市の瑞梅寺の水源で生まれ、曲渕ダムに運ばれ、夫婦石浄水場できれいにされて水道水となり、私たちの家庭まで届けられているらしい。百五十万都市の福岡市では、一日になんと四十万トン、学校のプールにして千百三十杯分の水が利用され、それを近郊五つの浄水場でまかなっている。頼りは福岡市に流れる百三十二本の川なのだが、実は水の豊富な川がなく、雨が少なくなるときには水不足になる恐れもあるほどらしい。昭和五十三年に実際に起こった大渇水を、両親も小さい頃に体験して覚えていた。降雨量が少なかったその年は、何回かの断水を繰り返したそうだ。当時の写真には、乾き切って細かく地割れした地面や、給水車に長い列を作るポリバケツを持った市民たちが写っている。

現在、久留米市を流れる九州最大の河川筑後川から、三十キロもの距離を大きな導水管でつなぎ、水を引いている。大変だったあの遠足の三倍もの距離をはると、二十四時間三百六十五日、絶え間なく水は駆けつけてくれ

る。久留米は両親の出身地だから、福岡県下で協力し合っていることがありがたく、心強く思った。

そもそも、この貴重な水はどこからくるのか？よく考えてみると水は地球の中を巡っている。雨が山に染み込んで、湧き水となって現れて、それが集まり川となり、海まで流れて蒸発し、その水蒸気が雲となり、大地に雨が降り注ぐ。まさに大自然の営みである。我々人間も含めたすべての生物を生かす奇跡の仕組みである。ただそれだけでは終わらない。その川の水が浄化され、無事家庭まで届くまでには、多くの人の努力がある。この「大自然」と「人の努力」は、二十四時間ずっと絶えることのない営みである点が共通している。この二つが合わさって、日本にいる私たちは、いつでも蛇口をひねれば新鮮な飲み水を手に入れることができる。安心して日々生活を送ることができるのだ。

生まれてから今まで断水などにあったことがない私も、熊本地震の際は、自然災害の厳しさと、普段の水のありがたさを思い知らされた。家族皆が大好きで通ったあの阿蘇が被災して丸二年が経った。そもそも私が毎日お世話になっている筑後川は熊本本の阿蘇生まれだ。熊本の水のおかげで日々の安心があることを思うとき、私はいつも、

「まず隣人を愛しなさい（マザーテレサ）」の言葉を思い出す。人は一人では生きていけない。まず自分に出発することから始めよう。あの遠足の日の公園の水は、阿蘇生まれの水だったかもしれない。

いつものように、また新しい朝が始まる。顔を洗うために蛇口をひねる私は、最近はずっと蛇口を少し戻す習慣がついた。阿蘇の大自然や熊本の復興を願いつつ、「大自然」と「人の努力」に感謝しながら、貴重な水を大切にしていこうと思う。